

<p>上演 8</p> <p>2022年8月 1日(日) 3校目</p> <p>四国 ブロック (愛媛県)</p> <p>愛媛県立 松山東 高等学校</p> <p>「きょうは塾に行くふりをして」</p>	<p>第46回全国高等学校総合文化祭演劇部門 第68回全国高等学校演劇大会</p> <p>講評文</p> <hr/> <p>生徒講評委員会 担当委員</p> <p>(富山県) 富山県立高岡高等学校</p> <p>川渕 春佳</p>
---	---

演劇のリハーサルという時間と行う人間が限られている特殊な状況をリアルに描くことで共感を生みつつ、演劇ができる喜びとその大なる力を感じさせてくれた作品だった。

舞台監督であるイブキをはじめとする演劇部は大会リハーサルの最中である。

1時間という限られた時間の中でリハーサルを進める彼らのもとに助っ人としてミナトがやってくる。時間に追われる中、椅子の配置やキャストの不在などの問題が積み重なり、演劇部員それぞれが思い描く演劇のカタチの相違によって対立してしまう中、助っ人のミナトは…。

演劇のリハーサル風景ということで、裏方のスタッフがイブキの指示を受けて適宜、音響や照明を操作したり、キャストが揉め事を何とか引きずらないように振る舞う様子は演劇に携わる者の共感を生み、会場内は爆笑の渦となった。また、演劇関係者でない観客にも演劇の空気感を感じてもらうことができているように感じさせられた。劇中劇でのオーバーかつダイナミックな演技からはキャストが自分自身の演技を楽しんでいる様子が伝わり、照明や音響と連動して、観客の心を引き込んでいた。また、音響や照明のブースとステージという前後からセリフが聞こえてくる構図は、観客を舞台の一部にいるかのように感じさせ、没入感を出すうえで非常に見事な効果があったという意見が多く出た。

ミナトは演劇のことをあまり知らないため、無意識に演劇部の足を引っ張ってしまうが、自分にできることを模索し、助っ人として最大限に働きかけようとしていた。その様子を踏まえ、講評委員の間では、日々の生活でやりがいもなくしていた彼自身が演劇という新たな世界に足を踏み入れ、演劇の素晴らしさを部員たちと共有することで再びやりがいを感じたとともに、演劇部員の無念を代弁したという事実が彼らを救ったのではないかという意見も出た。

この作品は、演劇部員と助っ人という見えているものが違う両者が、偽物を観てもらい、それによって感情が揺さぶられるという本物の体験を提供する演劇の素晴らしさと尊さを再認識させてくれる作品であった。また、その世界に足を踏み込んでみないとその本質は理解できないという簡単なようで意識しないとできないというメッセージも込められているのではないかという結論に達した。